

第4回会議の意見交換まとめ

令和7年3月6日（木）

第36期新潟市社会教育委員会会議（第5回）



第4回会議で出た意見

(Aグループ：こどもの多様な居場所づくりのための社会教育人材ネットワーク)

＜社会教育主事、社会教育士について＞

- ・社会教育主事の発令は名誉職になっているのではないか。
- ・地域教育コーディネーターが社会教育士の資格を持っていると一番望ましいと思う。
(全部の学校に社会教育主事や社会教育士の資格を持つ人がいると理想)
- ・社会教育士も称号でしかない。
- ・資格が取れることを謳う大学もあるが、地域教育コーディネーターのような仕事は、地域の人とある程度のネットワーク、探す力やつなげる力が必要で、新卒にできる仕事ではないと思う。

第4回会議で出た意見

(Aグループ：こどもの多様な居場所づくりのための社会教育人材ネットワーク)

＜地域クラブ活動＞

- ・新潟市は他市町村に比べて面積が広いため、保護者の送迎問題など踏まえ、全ての児童が地域のクラブにアクセスする際の地域的格差はないのだろうか。
 - ・今までの部活動に比べて費用がかかってくるため、経済的格差が生まれないだろうか。
- 全ての地域で同じ条件を揃えるのは難しいが、行政の力を使いながら解消できる方法はないか。
- ・数年前まではスポーツで強くなりたいと思う児童が多かった（勝利至上主義）が、今では友達とコミュニケーションをとり、関係を築きたいという児童が半数以上を占めている。
 - ・勝つことを目的としたクラブチームやレクリエーションを目的としたクラブチームなど色々あるとよいが、受け皿の確保が難しい。
 - ・数年前に教員にとったアンケートで、部活の顧問を続けたい教員は3割程度だった。
 - ・地域クラブ活動で講師として活動する人へ報酬が支払われる仕組みができれば、今まで部活の顧問をやっていた教員の力も借りれるのではないか。
 - ・保護者からの要望に対する適切な対応への不安から、指導者の確保が難しいのではないか。

第4回会議で出た意見

(Aグループ：こどもの多様な居場所づくりのための社会教育人材ネットワーク)

＜不登校児童に対する居場所＞

- ・新潟市の子ども支援室は、新潟市教育相談センター（中央区、東区、西区）や北区、江南区、秋葉区、南区、西蒲区にあり、東区と西区には分室がある。また学校内にはスペシャルサポートルーム（SSR）が設置された。
- ・不登校のこどもも居場所を多様に選べるようになってきた。
- ・他人とつながりたくないと思う児童が多い一方で、ネットゲームではたくさんの人とつながっている児童が多い現状があるが、本当に望ましい状態のだろうか。

第4回会議で出た意見

(Aグループ：こどもの多様な居場所づくりのための社会教育人材ネットワーク)

＜学校の空き教室の活用＞

- ・学校の**空き教室を活用**すべき。例えば児童館や保育施設に作ってもよいと思う。
- 新潟市でも既に空き教室を活用した取り組みがある。
- ・ひまわりクラブとは違って、全児童を対象とした放課後の居場所づくりの一つで「こどもふれあいスクール事業」がある。
- ・地域住民がスタッフになってこどもが遊びに来るような仕組みだが、**開催数は学校によって違い、行っていない学校もある。**
- 地域の人に運営をお願いするため、**スタッフの確保の問題**から回数を増やせない。
- ・学校の近くに児童館や児童センターがあるためこどもふれあいスクール事業を行わない学校もある。

まとめ

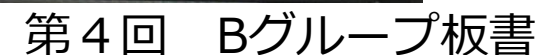
Aグループ【こどもの多様な居場所づくりのための社会教育人材ネットワーク】

- ・「こどもたちの放課後の居場所をどう作っていくのか」という大きな方向性が決まった。
- ・喫緊の課題は中学生の部活動の問題
 - 部活動は中学生にとって**大きな居場所**である。完全にフリーにするのは難しいのでは？
経済的、地域的・地理的格差のある子でも、**うまくアクセスできる状況**を
どうやったらできるのかを一緒に考えていきたい。
- ・こどもふれあいスクール事業は学校ごとに回数が違う、状況が違う、バラつきがある。



- ・どういう**状況**があるのか、まずは新潟市内のことを**正確に把握**したい。

(Bグループ：生涯学び活躍できる社会教育人材ネットワーク)



第4回会議で出た意見

(Bグループ：生涯学び活躍できる社会教育人材ネットワーク)

＜社会教育人材ネットワークに求める役割や期待＞

- ・まずは社会教育人材の役割や期待など、自分たち自身で整理が必要。

そのうえでどういう場所に配置されるべきか、どうすべきか検討するべき。

- ・社会教育施設に務める職員同士がつながったり、交流したりする機会があるのかをまずは調べるべき。

→どうなっていると「つながっている」というのか。年に1回会議で集まるだけでも、つながっているといえるのか。

→他市町村で既にやっている好事例だけでなく、失敗も含めた事例を聞くことで、イメージがわくのではないか。

- ・ネットワークの目的や状態について、まずは色々アイデアを出してみる。
- ・実際どこの自治体も社会教育人材ネットワークについては模索状況ではないか。
- ・文部科学省が考える社会教育人材ネットワークについて、新潟市としての見解が知りたい。

第4回会議で出た意見

(Bグループ：生涯学び活躍できる社会教育人材ネットワーク)

<社会教育人材とは>

- ・文部科学省が提示しているような肩書が必ずないといけないのか。
- ・そもそも「社会教育人材ではない市民」はどれほどいるのか。
地域の自治会など、社会教育と意識しなくても、みんな何かしら社会教育と関わっているのではないか。
- ・社会教育の主人公は市民一人一人であって、それをサポートするのが専門職の人だと考える。
- ・社会教育人材にはボランティアの人も含むのではないか。
- ・横のつながりが生まれることで社会教育の底上げをしていきたい。

第4回会議で出た意見

（Bグループ：生涯学び活躍できる社会教育人材ネットワーク）

＜社会教育の総合窓口のような仕組み＞

- ・社会教育について相談したい際に、現状の仕組みだとたらいまわしにされることが多いような気がする。
- ・現実的には難しいかもしれないが、網の目状で色々なところでネットワークをつなぐことで、どこで相談を受けても市民のニーズに応えられる、学びをサポートできる最適な場所を紹介できる状態があると良いと思う。

＜公共施設の有効活用＞

- ・公共施設がいかに使われるかによって、学びの場も増えると思う。
- ・自分でも気が付かないうちに社会教育に関われるような場が増えるとよい。
- ・小学校の空き施設などを有効に活用しているところはあるのだろうか。

まとめ

Bグループ【生涯学び活躍できる社会教育人材ネットワーク】

- ・ 文部科学省の方向性について、自分たちで調べていく中で、自分たちが考える新潟市の社会教育人材ネットワークに必要なこと、大事なことを提案していく。

(仮説を立てて検証を重ねていく)



- ・ まずは社会教育人材の役割や期待、ネットワークの目的や状態を検討する
- ・ 実際に活動しているところの好事例や失敗例を聞いていくことで、自分たちなりのイメージを深めていく